
提督立志伝 外伝

ふじばん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

提督立志伝 外伝

【Zコード】

Z3230E

【作者名】

ふじばん

【あらすじ】

提督立志伝本編では語られるこのなかった物語をここに書きます。提督立志伝の後日談やら裏側などなので、一話一話に話の繋がりはありません。提督立志伝本編を読んだ後に読まれる事をお勧めします。ちなみにこれは筆者の自己満足もいいとこです。笑って読める方のみ、お進みください。

0・1 滑稽な将（前書き）

本編、「リーズ提督3話」にて、ペイマ地方がウーンデス海軍に強襲されます。その強襲に至るまでのウーンデス軍の思惑です。

「ペイマで騒動を起しよしう」

フヨン提督は、フメレオン王に言った。
ペイマは、ファラス国境にある港町で、そこで騒動を起させば、必ずファラス水軍は出てくる。

そこでノコノコでてきたファラスの船を徹底的に叩き潰し、ウホンデス海軍の華麗なる緒戦を飾る。

世界にウホンデス海軍あり。 その事実を世界に知らしめるために……。

「ふむ……。 うまく行くのか?」

「これだけの船です。 事は容易い……」

「確かにファラス水軍なれども容易く下るであらう」

「陛下、お待ちください」

フヨン提督は内心、舌打ちをした。

東の国から陛下に取り入つて、近習まで上り詰めたこの車兜仙と名乗る黄色い猿を、フヨン提督は好きになれなかつた。

陛下も陛下だ。

何を好んで、こんな汚らわしい猿を御前に置くのか……。

ウホンデス王家には、ウホンデスの貴族だけを配置していればよいものを……。

「どうかしたか、車兜仙?」

「このたびの戦いは陛下の大事な緒戦に当たります。あまり無意味とも取れる軽率な行軍は控えたほうがよろしいかと」

「だまれ、こわっぺー！ 言つて無意味だと！？ 言つてしまえばこのたびの出陣はウーンデスの勢いを世界に知らしめるための戦！ 近習風情が国を語るとは何事か！」

「……へ」

確かに車児仙は近習に過ぎない。方やもう一方はウーンデスにおける大貴族。車児仙がいくら何を言つたどこりで、この男の発言に口を挟むことは許されない行為なのだ。

「陛下、その口が過ぎる猿を傍に置いておくのは陛下の品が問われますぞー。」

王家にとつても、厄介なこの男の身分。

王に堂々と意見を述べることができるだけの地位を有している。この男を無下に扱つたが最後。何も準備できていない状態で、全ての貴族たちを敵に回し、王家は自壊しかねない。

まだ、このフーンとこつ男を処断するには準備が必要なのだつた。

「それでは、陛下。私は出陣致しますぞ。ウーンデスにフーンありと、声高らかにファラス国民に知らしめてやるのです」

そう言つて、フーンは退廷していった。

「車児仙」

「は……」

「主いらしくもない。まだ決行の時ではないと言つてはいたのは主で
はないか」

「すみません……。ただ、いやな予感がしましたので」

「予感?」

「はい……。我らにひとつては事態を好転させられる機会かもしれ
ませんが、そのためには犠牲が必要になる」とが……」

「どうこいつ意味だ?」

「フアラスに我が國を警戒している男がいます」

「ほう?」

「名はリーズ水軍中夫。あの国柄にしては妙に先見の明が備わつ
ている逸材かと」

「だがな、車兜仙……。水軍中夫といえば、たがが一艦の艦長で
あらう? そんなやつに何ができる?」

「おつしやる事、もつとも……」

「いくら無能なフエンといえども、この優勢に抜かりがあつたらそ
れはそれを理由に奴の権力を削ぐことができるが……。しかし、
それはあの船が沈まない限り難しい問題だぞ?」

「御意……。さすがにそれはあり得ませんね……」

しかし、皮肉にも車児仙の杞憂は的中した。

たつた一艦の最後の突撃に、旗艦が沈没させられる。

フーンは、この失態によつてかつて先祖が築き上げた功績を、失墜させ、発言力を低下させた。

これが元で、リーズがウェンデスに仕官出来る土台ができたのである。

0・1 滑稽な将（後書き）

しづした土台の元、リーズはウェンデスに仕官できるわけです。
貴族の反対意見をフレオングが押し切れた訳が、フェン提督の失
態というわけで。
語り損ねた伏線回収つと……。

あんまり、よろしくない回収方法ですね。 反省反省。

0・2 惡宮の最後（前書き）

本編「リーズ提督 8話」で語られた車児仙の故国、円帝国の最後です。あんまり本編では重要視していなかつた為、模倣編に舞台が切り替わるときの大陸の情勢説明の時、この国の名前がないため、「あら?」つと思つた読者様もいると思われましたので、ここに簡単に記載。

帝位継承戦争と呼ばれる、ヴィンセント帝国で起じた次期皇帝を争つた大規模な動乱。

周辺国家や、藩属国家はどちらかの支持を強制された。

かく言つ、円帝国も、どちらかの支持を表明せざる得ない状況に陥つていた。

かつて、霸王と名乗る男が立ち上げた強大な国家も、ヴィンセント帝国に国威では負けており、従順な態度をとつていたわけではあるが、突如降りかかった難題に、実質、国の権力者である長項はどちらに着いたほうが利があるか、考えあぐねていた。

長項は現帝の教育係の宦官で、その立場を利用して国の宰相に収まつたのだが、外交方面はやはり疎い。

こついう時、優秀な家臣団がいれば、戦局を見て正しい意見を長項にしだらう。

しかし、長項は自分の権力を維持するため、優秀な家臣を次々と粛清し、自分のイエスマンしか周囲に配置しておらず、的確な判断ができないでいた。

先帝の長男である三歳の幼帝ニグラウを擁立した一派に付くか。
先帝の末弟の現帝デュライを立てた一派に付くか。

「ニグラウはまだ赤子も同然。 うまくやれば出し抜くこともできるか」

長項のだした結論であった。

ニグラウが、次期皇帝になるところと、政治を執り行うのは周囲の家臣団。その家臣団に取り入れれば、自身もまだまだ甘い蜜を吸えるというものだ。

かといって「デュライは扱いにくい」。

まさに絶対君主制とでもいえる統率であり、長項が取り入る隙がないから……、といつ判断である。

いまのうちにニグラウ軍に媚を売るため、物資の援助を行おう。しかし、長項の思惑はうまくいかなかつた……。

長い戦乱の中、圧倒的統率を誇る「デュライ軍」が、ニグラウ軍を撃破してしまつた。

そうなると長項も焦る。

長項は、國を預かるべき宰相とは思えぬ行動を取つた。

「この度のニグラウ支持は、我が主君、新帝（円帝国の皇帝）の独断によるもの。私はデュライ殿下の支持を推し進めたわけであります。全ての咎は新帝にあります」

長項は、デュライ皇帝の前で、円帝国のニグラウ支持を全て、自分の主君のせいにした。

「ほお？」

デュライは頬杖をつきながら、長項の言上を聞いていた。

「これに、円帝国が、ヴィンセント帝國に逆らわぬ証として、逆賊新帝の首をお持ひしました」

長頸は、塙瀆けにした元主君の首をトコライに差し出した。

「私はこれ、この通り、ヴィンセント帝国に逆らひし首魁の首を持つて参上した次第であり、私を是非ともヴィンセント帝国の末席に加えていただきたく……」

「長頸と申したな。汝は、田帝国を余に差し出すと申すか?」

「御意で」やうに。田帝国の全て、今このとおり帝王様のものでござりますか?」

「それで、そちは我が国で爵位を望むか?」

「爵位とまでは申しません。末席に加えていただければと思つておる次第でござります」

「ふむ……」

トコライはそつ返事すると不敵な笑いをした。

「確かに、田帝国は」のトコライがいただこう

「ははー。」

「ただな

「は?」

「余が最も嫌うものがある。長頸よ、そちには分かるか?」

「帝王様が最も嫌う」とで「なぜこますか?」

『……』

氣付くと長頸の周りには数名の兵士が立っていた。

ー 帝王様！？ な、何を！」

「己の立身出世のために、自分の主君を売る行為。
つかりし時、貴様は余を裏切り、別の強者になつるのは今回の件で
明らかにされた……。 それでも余の末席に加わりたいと申すか！」

ひ
！

「見るのも田障りだ！ ひとつ殺してしまえ！」

兵士は剣を抜き、長刀を後ろから切り捨てた。

宮中が下衆の血で汚れてしまつたか

0・2 惡官の最後（後書き）

印帝国のモデルは秦帝国。長項のモデルは趙高。またそのまんまなパロディ

霸王とは、始皇帝みたいな人と思つていただければ幸いです。

史実でも、惡宦官趙高は、自分の権力保身のため、自らの王を裏切ろうとし、前漢帝国の始祖、劉邦に内通します。史実では、それが発覚し、王に処断されましたが、今作では、発覚せずに今回に至つたというわけです。

こいつ、気持ちのいいくらい救えない悪人です。項羽と劉邦や、史記にこの男の事が載っていますので、興味のある方は一度拝読してみてください。

ある意味笑えます。

「そりいえばリーズ提督。一度お聞きしたい」とがあったのです
が

車兜仙は、海軍省に帰らつてゐるリーズを捕まえて聞いてきた。

「提督は新白衆を雇つておられますか、まさか無償で働かせている
なんてことはあつませんよな?」

「当たり前です……。そんなことできるわけがない」

「私が常々疑問に思つていた事はそこなんですよ。個人が諜報機
関を維持することは難しいことです。かといってリーズ提督は海
軍予算から新白衆に払うべき給^トを請求していない。誰もが思つ
疑問だと思いますが?」

「海軍予算から請求できるわけないでしょ。ボク個人の私兵を
まさか予算からとつたらそれはもはや着服です。そんなことが公
になつたら、貴族どもが黙つていないでしょ」

「私兵と言つて切つましたね?」

「突つ込むとこはそこですか?」

「まあ、つまりは、新白衆はあえてウーンデス旗下には置かない…
…。そりこりで?」

「その通りです」

「なぜ？」

「なぜって……」

「新白衆はもはや海軍の正式な諜報機関であると内外に認められております。 ですので、海軍予算から請求したところでだれも咎めませんよ？」

「車児仙殿、あなたも意地が悪い。 私があえてウエンデス旗下に置かない理由……、なんとなく気付いているでしょう？」

「国の制約に縛られず動ける諜報機関、といつわけですか」

「それに、ウエンデスには諜報部といつ、ウエンデス国家独自に機関もあります。 一国に一つの諜報機関の存在を議会が許すと思いますか？」

「まあ、 そうでしょうね。 実力、 実績を考えれば新白衆に劣る諜報部は即時無用の存在として消えてしまつでしょうね」

「そんなことになつたら余計、 戦乱の火種を生むものです。 ただでさえ、 存在意義を問われている諜報部が、 新白衆のせいで潰されたら、 謀報部はだれを恨むと思いますか？」

「まあ、 新白衆を連れてきたリーズ提督でしょう」

「連れてきたってかなり語弊がありますね。 ボクより先に新白衆はウエンデスにいたはずですが」

「世間の田はそつなつております」

「まあ、ボクに矛先が向くのも勘弁してもらいたいね……。 かといつて多恵に向くのもどうかと思つ」

「余計な争いは好まずですか?」

「そういう事です」

「では、話を戻しますと……、新白衆の給^ヒ。 どうやつて捻出しているのです?」

「…………」

「リーズ提督?」

「車児仙殿、あなたは監査ですか?」

「まさか、そんのは財務省の小役人がする仕事です。 私の場合はただの知的好奇心といつわけですよ」

「知的、好奇心ねえ……」

リーズはその場を去りつとする。

「まあ、まあ、リーズ提督。 私は読者様の代弁をしているだけですよ? その読者様の疑問を解決させるため、私が一肌脱いだわけです」

車児仙はニヤリと笑う。

リーズは車児仙のこの妙な駆け引きがやや苦手であった。

車児仙も、読者様が知りたいという大義名分のもと、強くリーズに解答を迫っていた。

「わかりました、わかりました……。 答えはボクの私財より出しています」

「私財？ まさか提督給金なんて微々たるもの。 そこから捻出しているなんて苦しい言い訳、私には通じませんよ？」

車児仙は、一枚の紙切れを出して、リーズにつきつけた。

「……これは？」

「一人辺りが一ヶ月食べるに困らない金額と、作中にでてくる新白衆の里の規模を考察した計算表に、リーズ提督が月々国から頂いているお給料の比較をした図です！」

「そんなもの用意していたのか……。 なんとも暇な」

「そんなことはどうでもいいんです。 これをよく見て下さい。

提督給金と里の維持代、どう考へても里の維持代の方が桁違いに差があります。 さあ、だれもが納得の行くご解答を！」

「まあ、ファラスにボクが経営している金鉱があるわけで、そこから経費をうかしているんだけど」

「はあ？ 何その取つて付けたような言い訳は！ そんな急造

臭い言い訳、誰が信じじると思つてゐるんですか?「

「いや、事実なんだつて。そもそもファラスは金鉱地帯であることは、作中で述べられてゐるよね? で、陛下から密将としてウエンデスに仕官するとき、領地安堵の名目で一つの鉱山を承つたんだよ」

「そんな現実離れした話で、私をケムに巻きつなんて100年早いです。 まあ、真相を!」

「これが正真正銘の真相だつて。 そもそも当時は貴族の連中もいたからウエンデスの目立つ位置で所領安堵されるわけには行かないだろ? ボクは俗に言う外様ですよ」

「そもそもウエンデスに所領安堵がある事事態、初耳です。 そんな表記作中に登場していなのはずですが?」

「筆者のふじさんは、あんまり物語に関係ない文章は省略する癖があるじゃないですか。 」の辺りもまさに該当するわけですよ

でなきや外伝なんか書きません。 (筆者談)

「全く、取つて付けた設定臭いですね」

「すでに話数だけはいっちょ前に進行していきますからね、本編。 そう思われても致し方ないかと」

「で、それが最終解答で?」

「「」の期に及んで何を隠す必要性がありますか?」

「やうですか……。なんとなく、取つて付けた感が否めないのも、話数が進行しきて今更説明しても嘘臭く聞こえるせいであると主張するわけですね?」

「やうです

「納得する」とでも?」

「納得してく下さい」

「だがしかし、提督といつ多忙な職務を行いながら、金鉱の経営なんてやっていられないのでは?」

「所有者はボクですが、きちんと管理している人がいるんですよ」

「どういった間柄で?」

「陛下からの紹介だよ」

「……は?」

「当然、ファラスでも異端だったボクにそんな簡単に管理を任せることが出来る知人がいるわけない。困っていたボクに今の管理者を紹介してもらつたんだ」

「ははあ、相変わらずとつて付けた言い訳っぽいですね」

「…………否定しないよ。 というか、いまやうじや何がどうい

「設定でもとつて付けた感があるんでは？」

0・3 新白衆の給句（後書き）

作中でもとつて付けた感が拭えないとか散々ほざきましたが、一応設定はしました。

いつか本編で書こうとか思つておりましたが、もはや時遅し……。
第一章、倭国動乱の模倣編が始まつたんで書く機会がなくなりましたので、ここに……。
物書きとしては失格ですね

1・1 召還、残された家族

「ネズミーワールドの大観覧車爆発、乗客50人生存絶望的」

有名な遊園地で起きた大惨事。

その事件が起きて10日たつたある日。

「……………ですか。　はい、はい……。　そうですね。　いえ、大丈夫です。　それでは……」

山県組の事務所で肃々と仕事をする山県社長。
最愛の娘と、我が子同然の従業員の死をいまだに受け入れずにいた。

「穂波町の武田さんち、老朽化したから建て替えるそうなんだ。
鉄つちゃん、銀太くんと見積もりにいってくれないかな？」

「……………」

「遙が学校から帰つて来る前に出発してくれよ。　じゃないと自分も行くと行つて駄々をこねるから……」

鉄つちゃんとよばれた従業員は何も答えなかつた。

「あなた……」

「そうだ、今日の夜、」飯は銀太くんの好きなうな重にしてじゅうじゅな
いか。　銀太くん、うな重ならいくらでも食べるからな」

「そろそろ銀太くんにこの仕事を任せてもいい頃合いかな。くんも人を動かす事を勉強してもいい頃合いだしね」

「社長、見積もりに行つてきます」

鉄つちゃんによばれた従業員は、一礼して出て行った。

チリリリン、チリリリン

「はい、山県組」

「私、ネズミーワールド株式会社管理部部長の鳩山といいます。この度はご愁傷様です」

「.....」

「それでお葬式に社長が出席したいと行つておりますので、お葬式の日程をお伺い.....」

「.....ふざけるな」

「はい？」

「何が葬式だ！ 貴様！！ 遥を返せ！！ 銀太くんを返せ！！！」

「え、いえ、その.....、当方と致しましても、事故の原因究明に全力を注いでおりまして.....、決して観覧車があのよつた爆発を起すことは有り得ないと」

「有り得ない、だと！？ 現に！！ 現におたくんとの観覧車が

爆発してゐるじゃないか！！」

「そ、それは、警察の発表の通りあの爆発はテロだと……」

世間では、観覧車爆発事故の原因はテロだと断定した。では一体誰が何の目的で？

なんでも犠牲者の中に某大物政治家が孫と一緒にお忍びで遊びにきて、それを狙われたとかなんとか……。

某大物政治家の死によつてその政治家が所属していた与党は混乱を起こし、野党は、やれ対応が遅いなどと攻撃材料を入手し、意気揚々だ。

「（）遺族の気持ちを少しでも考えたことがあるのか！」

「犠牲者の無念、それを晴らすことこそが私の使命だと自負しています！」

野党は、私の気持ちの代弁だと声高らかに言つ。私がいつもお前たちにそう言つてくれと頼んだ？

今回の事故であわよければ政権を奪取できるかもしれないという下心丸出しで、大義名分を得たようにピークパーキュウルサイ。

「遙……、銀太くん……」

私は認めていない。

あの一人が死んだなんて！

1・1 召還、残された家族（後書き）

まあ、政治批判ではあつません。

なんていうか、やりきれない怒りと悲しみを誰にぶつけるか、というテーマのもと書いたらこうなったわけで……。

銀太らが召還された時期はまだ自民党が「党だつた時期投稿していますが、ふじさん自身、自民党は嫌いじゃないです。いつそ今政権持つてくる口だけの某党よりははるかにマシ……やめておきます。消されたくないので。

なんだろ、こんな時間に来客のようですが、それでは。

第一章第六話イフ（前書き）

第一章第六話でクラブが本編と異なった選択をしたパターン。
第六話の視点はエルニエルでしたが、本話視点はクラブなので途中
まで本編と同じ流れです。

田の前に立ちはだかるのは自分の三倍はある巨大な鋼鉄の蜘蛛。手持ちの獲物と千冬の双銃でなんとかなる相手かといつと残念ながらNOだ。

それにこの獲物は使うわけにはいかない。

ファラスの爆炎という忌み名を捨てるためにここに来たんだ。ファラスの爆炎といつ忌み名が風化するまで使うわけには行かない。

何もかも捨ててポシューマスまでやつてきた意味をこんな早々に見切つてしまつていいのか？

限りなく否。

ファラスでリーズ兄に押しつけてしまつた負担をここでも姉に押し付ける事になる。

そんな事はとてもじゃないが許容できない。

俺の獲物、爆弾を使うだけでファラスの爆炎、ポシューマスに健在と俺を追つている奴らの耳に届くだろう。

だから爆弾を使うわけにはいかない。

となると俺の手持ちの武器は護身用に身につけていた果物ナイフ大の短剣のみ。

一応、戦闘用に鍛成されている短剣とはいえ、あんな鋼鉄でできた蜘蛛の肉を刺す事は叶わぬだろうが、肉弾戦に挑むよりは何倍もマシといったところか。

頭の中によがるのは「これは最早アカデミーの試験ではない」ということ。

そりやそつだ。

アカデミーは受験生を殺して何の得がある？

非難されるのが明白であんなものを配置する必要を全く感じない。

そもそもこんなのが、ベテラン冒険者でも対処するのは極めて難し

い。

こんなと戦い、何を計る？

無い、無い。

こいつはアカデミーにとつてもイレギュラーともいえる存在だ。
さて、攻める手段がない。

向こうの力切れを自論んで逃げ回るのもいいが、先にこちらが力
切れや判断ミスで被弾してもおかしくない。

今の所、五発ほど鋼鉄の蜘蛛の頭から発しているレーザーを避け
ている。

発射するまでのタイムラグがわかつてはいとはいえ、向こうの飛
び道具は光速。

反撃出来るタイミングを見つけなければこのまま力尽きる。
どうする……。

その時、蜘蛛の頭に威力の弱い魔法の弾がパンと音を立て、当た
った。

あれはホーリーライトとかいう光属性の魔法だつたか？

「私がこれを引きつけるから逃げて下さい！」

そう声を発したのはプリーストの戦闘衣に身を包んだ女人。
こんなにタイミングよく、こんな場所に援軍がくるということは
俺たちの試験官として俺たちを付けていたあらう人か。
さすがにあの年で教官つてことはないだろ。

教官にしては能力低すぎるだろうし、この場で勝算もなくノコノ
口でてくるなんて未熟から来る愚は犯さない。

となるとあの人は試験官の手伝いかなんかしている先輩、つてと
ころかな。

だが、無茶な注文をしてください。

逃げる？

それが出来るんならすでに離脱している。

あのビームをかいぐつてどうやって逃げる、つと？

「逃げるならどうの昔に逃げてますよ、先輩」

あの蜘蛛に背中を見せたら即撃たれる。

鋼鉄の蜘蛛は先輩にターゲットを変更した模様。蜘蛛から発射されるレーザーは先輩に直撃した。

「！」

先輩の周りを覆っていた光の壁らしきものはパリンと、割れる。あれはある程度のダメージ量の物理攻撃を無効にするバリアで確かキリエイソンとかいう教会系の防壁魔法だったか。

あれは術者の魔力と被術者の防御力に比例して防壁の層が厚くなる典型的な術。

あの先輩、一撃だけとはいえるバリアを耐えるだけの防壁を張れるのか。

だが、あの魔法はかなり魔力を消耗すると聞く。

いずれ力尽きるのは目に見えていた。

なら、魔力を外的要因で回復させればいい。

俺の手持ちに、魔力を回復させるアイテムもある。

瓶に入った一般的な魔力回復アイテム、青い水と、その青い水の原料を粉末にして爆弾に詰め込んだ俺命名の青い爆弾。

回復量は青い水の方が高いが、青い水は飲まなければ効果を発揮しない。

しかし青い爆弾は、爆発して飛散した粉を呼吸と一緒に体内に取り込む事ができるので、その飲む為に費やす時間を考慮すると、やはり青い爆弾の方が効率がいい。

が、青い爆弾を使用するのには問題点が一つ。

青い爆弾を使用する冒険者は冒険者多しといえど、ファラスの爆炎と呼ばれた冒険者くらいなものだ。

つまり使えば知っている人にはばれる。

それはマズい。絶対ダメだ。

先輩は改めてキリエイソン、防壁を張る。

が、張つた後に見える疲労感。

つまり後、だいたい三回貼ればいいほう、か。先輩が力尽きるのはこのままでは後ちょっとだ。どつちにしろ魔力回復は急務。

「先輩！」

「へ？」

そうして俺は先輩めがけて瓶詰めの青い水を投げた。

先輩は先輩めがけて投げつけた青い水に気付いて手を伸ばそうとするが、蜘蛛は再び先輩めがけてレーザーを放つた。

「きやああああ！？」

先輩はバリアに護られているとはいえ、相手の攻撃は先輩のバリアを一撃で破壊するほどの火力。

先輩はバリアが碎かれると同時にレーザーの火力を相殺した際に生じた衝撃波によつて尻餅をつく。

そのラグのため、先輩めがけて投げた青い水が入つた瓶は、パンと、先輩の手前で割れてしまった。

「げ……」

俺らがその事実を認識し、一瞬止まつた隙を好機と見なした蜘蛛は、第一射を先輩めがけて放つ。

「しまつー？」

一瞬の油断。

先輩のいた箇所はクレーターができており、先輩の姿はゼニにもなかつた……。

「う、うそだろ？」

明らかな俺の判断ミス。

ファラスの爆炎を隠したいという俺のいらない意地が、かなわないとわかつていながら助けにしてくれた先輩を見殺しにしてしまった。

なんとかする手段はあったのに、俺のへんな意地のせいで！

「クラブさん……」

「え？」

千冬の声で我に戻るが、これは既に時遅し、といつか……。

蜘蛛の田は俺を捉え、レーザーの発射準備を整えていた。回避はもう絶望的。

「「」めんな……」

最後の言葉だった。

b
a
d
e
n
d
.....
o

第一章第六話 I.F.（後書き）

いや、某ノベルゲームに触発されまして……。
もはや外伝が提督立志伝ならなんでもありになつてきた……。
ちなみにI.F.への分岐はさくっとばれていますしじょうが、本編では
青い爆弾、I.F.では青い水の入った瓶を投げています。
そこからの分岐でこうなつてしまつたというわけです。
書いてみて思ったことですが、クラブ、お前綱渡りすぎる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3230e/>

提督立志伝 外伝

2010年10月10日02時31分発行